

五番町遺跡 発掘調査報告書
—第12次調査—

2007

神戸市教育委員会

五番町遺跡 発掘調査報告書

—第12次調査—

2007

神戸市教育委員会

例言

1. 本書は現住所・兵庫県神戸市長田区北町1丁目にあたる地内の埋蔵文化財発掘調査報告書です。
2. 本報告の調査はフクダ住建株式会社による集合住宅建設事業を原因とするもので、神戸市教育委員会が平成19年2月5日から、平成19年3月28日まで実施したものです。
3. 本書で使用した方位は座標北を示し、水準値（標高）は東京湾中等潮位（T.P.）を表わしています。
国土座標は世界測地系を用いています。
4. 本書に掲載されている出土遺物写真は、杉本和樹氏に撮影作業を委託して撮影されたものです。現地の遺構写真は神戸市教育委員会学芸員 石島三和が撮影したものです。
航空測量図については㈱GEOソリューションズに図化作業を委託して作成されたものを使用しています。
5. 本報告の発掘調査は平成18年度に、出土品整理作業は平成19年度に行われたものです。調査は神戸市教育委員会の、以下のような組織によって行われました。
- | 平成18年度 | 平成19年度 |
|-----------------------|----------------------|
| 教育長 小川 雄三 | 教育長 小川 雄三 |
| 社会教育部長 大谷 季正 | 社会教育部長 黒住 章久 |
| 参事(文化財課長事務取扱) 柚木 一孝 | 参事(文化財課長事務取扱) 柚木 一孝 |
| 主幹 丸山 蘭 | 主幹 丸山 蘭 |
| 文化財課埋蔵文化財調査係 係長 丹治 康明 | 文化財課埋蔵文化財調査係 係長 千種 浩 |
| 文化財課 主査 安田 滌 | 文化財課 主査 安田 滌 |
| 調査担当学芸員 石島 三和 | 出土品整理担当学芸員 黒田 勝正 |
| 保存科学担当学芸員 中村 大介 | 調査担当学芸員 石島 三和 |
| | 保存科学担当学芸員 中村 大介 |
6. 本書の執筆・編集は神戸市教育委員会文化財課 学芸員 石島三和が担当しました。出土遺物のうち動物遺体に関しては、京都大学大学院 丸山真史氏から教示を得ました。また出土遺物の修復および調査にあたって、黒田恭正から教示を得ました。
7. 現地での発掘調査及び出土品の調査・整理作業は、国庫補助金および文化財保護法に基づき調査原団者であるフクダ住建株式会社の費用負担によって行われました。
- 同社より文化財保護に関する理解と協力を得られましたことをここに記して、厚く御礼申し上げます。

目次

序

例言

目次

五番町遺跡 第12次調査

第1章 はじめに

1. 五番町遺跡について～調査の経緯と経過～	1
2. 調査結果の概要	2

第2章 遺跡周辺の歴史

1. 中世初頭の長田区	3
a. 王朝国家の終焉と平氏の台頭	3
b. 平氏の挾津進出	3
c. 安平時代末期の集落の様相	5

第3章 基本層序

1. 基本層序	5
---------	---

第4章 遺構

1. 遺構の概要	9
2. 掘立柱建物	9
a. 掘立柱建物 1	11
b. 掘立柱建物 2	11
c. 掘立柱建物 3	13
d. 掘立柱建物 4	13
e. 掘立柱建物 5	13
3. 溝 1	14
4. 壁穴建物	15
5. 小結	17

第5章 遺構出土の遺物

1. 概要	18
2. 遺構出土の遺物	18
a. 掘立柱建物 1 および 2 出土の土器	18
b. 掘立柱建物 3 出土の土器	21
c. 掘立柱建物 4 出土の土器	22
d. 掘立柱建物 5 出土の土器	22
e. 溝 1 出土の土器	23
f. ピット出土の土器	24
g. 壁穴建物出土の土器	26
3. 土器以外の出土遺物	26
4. 遺構面以下層の出土遺物	26

第6章 考察

1. 器種構成	27
2. 型式と年代	27
a. 須恵器碗	27
b. 上師器皿・小皿	29
3. 土師小皿の形態分類	29
4. 共伴関係	30
5. 実年代および同時期の周辺集落	32
6. 結語にかえて	32

写真図版目次

- P.L. 1 1. 第1遺構面 中世掘立柱建物群 検出状況 北から
P.L. 2 2. 掘立柱建物 3~5 検出状況 北から
3. 壁穴建物 検出状況 南から
P.L. 3 4. 掘立柱建物 1および2 検出状況 南から
5. 掘立柱建物 土器出土状況 南から
6. 掘立柱建物 土器出土状況 南から
7. 掘立柱建物 土器出土状況 南から
P.L. 4 8. 調査区北半第1遺構面 検出状況 北から
9. 調査区北半第1遺構面 検出状況 北から
10. 調査区北半第1遺構面 検出状況 北から
11. 調査区西壁 地層堆積状況
P.L. 5 12. 溝1出土 須恵器塊
13. 溝1出土 須恵器塊
14. 溝1出土 須恵器塊
15. 溝1出土 須恵器塊
16. 溝1出土 土器
P.L. 6 17. 掘立柱建物 2出土 上師器皿
18. 掘立柱建物 2出土 上師器皿
19. 掘立柱建物 2出土 土師器杯
20. 掘立柱建物 2出土 土師器皿
21. 掘立柱建物 2出土 土師器皿
22. 掘立柱建物 2出土 上師器皿
23. 掘立柱建物 2出土 土師器皿
24. 掘立柱建物 2出土 土器
P.L. 7 25. 掘立柱建物 5出土 土師器皿
26. 壁穴建物出土 上師器皿
27. 壁穴建物出土 土師器鉢塊
28. 包含層出土 須恵器
29. 溝1出土 鉄鏃
30. 掘立柱建物 1 出土上器
31. 掘立柱建物 2 出土馬鹿
32. 包含層出土 土師器
33. 包含層出土 壁材
34. 溝3出土 石礫
35. 濡地堆積層出土 陶器
36. 包含層出土 土器
P.L. 8 37. ピット出土 上器
38. 濡地堆積層出土 土器

第1章 はじめに

1. 五番町遺跡について～調査の経緯と経過～

本書は長田区北町1丁目に所在する五番町遺跡の発掘調査報告書である。本書で報告する発掘調査は、共同住宅（マンション）建設に伴って行われたもので、現地での調査は平成19年2月5日から開始し同年3月28日に終了した。

調査の対象となったのは発掘調査に先行する試掘調査によって、工事施工範囲のうち、建物基礎によって地下の文化財が失われると確定した部分である。

対象地の広さは約430m²である。工程の便宜上、調査は南北に長い調査区（図 参照）を北半と南半に2分割し、さらに北半部に関しては、東西に3分割して実施された。そのため遺構検出状況等の写真は各範囲ごとに分割して撮影されている。

五番町遺跡は1978年に始めて発掘調査が行われ、以後11度にわたる発掘調査が実施された。今回の調査は12回目の発掘調査である。

過去の調査の結果、五番町遺跡は縄文時代にはすでに人の生活領域として始まり、奈良時代、平安時代を経て鎌倉時代など、中世初頭に向かって展開した、複数の時代にまたがる集落遺跡であると考えられている。しかしこれまでに住居址の発見例は少なく、集落本体の位置など、その実態はまだ不明な点が多い遺跡である。

調査日誌抄

平成18年

2月5日 調査区北半部 I区調査始。
中垂包含層を検出するも、頭
著な遺構の存在確認できず。

2月15日 I区埋め戻し。II区調査開始
I区と同様の堆積層を確認。

2月21日 II区 湿地性堆積層に到達。
弥生前期多状沈線土器と縄文
晩期安帝文土器が共伴して出
土。
III区も同時並行で調査中。

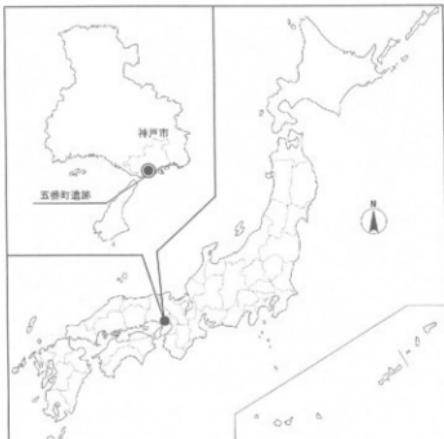
3月7日 調査区南半部 調査開始。

3月13日 平安時代末期造構面に達す。
掘立柱建物複数検出。

3月14日 堅穴建物検出。古墳時代前期。

3月26日 中世造構面以下層の確認開始
北半部同様の堆積状況。
湿地上堆積層が、12次調査区
全体に広がっていることを確
認する。

3月28日 全ての現地調査を終了する。



第1図 五番町遺跡の位置

2. 調査結果の概要

今回の調査で確認した遺構は、調査区南半部に集中していた。ただし地層の堆積状況は、調査区の北半部も南半部もほぼ基本的に同じであった。遺構の密度が著しく南側に偏っている原因には、集落域の縁辺部に近い部分であることなどが考えられる。遺構の分布範囲から見て、当時の集落の範囲や人間の活動圏は今回の調査地のうち南半よりさらに南側にむかって広がっていくもので、今回の調査地はちょうど遺跡の北端に位置する可能性が考えられる。

遺構面を形成する地層は主に標高7.80m地点前後に堆積する黒灰褐色粗砂層の上面で平安時代後期の掘立柱建物5~4棟と、古墳時代前期の竪穴建物1棟を確認した。



第2図 調査地の位置(S=1/5000)

第2章 五番町遺跡周辺の歴史

1. 中世初頭の長田区

先述のとおり、今回の発掘調査で確認された遺構は平安時代後期を中心とするものである。この当時の集落およびその周辺地域がどのような時代背景にあったのかを本章では概観しておく。

a. 王朝国家の終焉と平氏の台頭

12世紀末、平安京におけるそれまでの貴族中心の政治制度の崩壊とともに、日本における中世社会の幕は開ける。

その前段階である平安時代後期は、古代から中世への過渡的段階として、中世的社会への傾斜を深めつつあった。地方支配の基本形態は国司による統治である。

また平安時代後期は、それまで貴族中心であった政治の舞台において、武士が台頭した時代もある。武芸をもって貴族に仕えた武士たちが、「源氏」と「平氏」という2大棟梁のもとに権力を争うものこの時代である。

b. 平氏の摂津進出

応徳3年（1086）白河上皇が院政を開始すると、院の近臣集団等の権門勢家の家人となった地方豪族たちが、京在住の貴族に代わって地方支配の実権を握っていく。

この時代、神戸と縁が深いのが平氏一門である。ただし院政以前の時代、摂津を根拠地としていたのは、多田に拠点をおく多田源氏一党であった。長和3年（1014）には源頼親が摂津守に任せられている。

11世紀初頭の平氏は、伊勢を根拠地としており、中央との密接な関係を契機に台頭しつつあったものの、まだその後の西国進出にいたる前段階である。

それが嘉承3年（1110）平正盛が但馬守に任せられたあたりから、次第に西国進出が顕著になる。

正盛の子忠盛の時代には瀬戸内海に横行する海賊追討によって実質的には瀬戸内海近縁まで、平氏が勢力を伸ばしていたのではないかと考えられる。

やがて保元元年（1151）、「保元の乱」で活躍した平清盛が恩賞として播磨守に任せられたころには、「東国の源氏 西国の平氏」と称されるように、平氏は安芸・淡路を拠点に瀬戸内海の要衝を押さえ、西国一円に勢力基盤を置くようになる。

平治元年（1159）「平治の乱」で源氏勢力を押しやると、平清盛は一気に政治中枢に上り詰める。

瀬戸内海に勢力基盤を据えていた平氏の頭梁清盛は、このころ摂津大和田泊を拠点に日宋貿易を展開し、大和田泊の北に隣接する福原に移住する。この時点でおそらく摂津国八部郡一体は平氏の私領化していたものと考えられている。



第3図 五番町遺跡周辺遺跡 分布図

c. 平安時代末期の集落の様相

大和田泊とは今の兵庫港付近を指し、近世兵庫津として繁栄する湊である。

この一体は現在兵庫津遺跡として近世遺構を中心に発掘調査が進んでいるが、調査成果のなかには、清盛が築いた兵庫島に関連するのではないかと思われる遺構発見例も含まれており、平氏支配当時の繁栄をも忍ばせる。

清盛が山荘をかまえたという福原は、今日兵庫区半野付近だったのではないかと考えられている。大和田泊から湊川を遡ると、兵庫区荒田町に行き着くが、この一体は楠・荒田町遺跡と呼ばれ、ちょうど清盛が福原遷都を実行した12世紀後半の掘立柱建物や二重環濠などが発見されている。

同じく兵庫区上祇園で行われた祇園遺跡の発掘調査では、12世紀後半の貴族の庭園跡と考えられる遺構を確認しており、福原京関連の遺構ではないかと考えられている。

大和田泊および湊川上流に点在する平氏関連の遺跡は、いわば平安時代後期における町場であり、平氏とともに畿内先進地として繁栄していったと考えられる。

六甲南麓を舞台に、これら北と南の町場に挟まれて、五番町遺跡ほか、同時代の集落遺跡が点在していたことも、これまでに行われた発掘調査で確認されている。

五番町遺跡と北に境を接する長田神社境内遺跡は、式内社長田神社の参道にそって展開し、五番町遺跡とほぼ同時代の集落と考えられている。

五番町遺跡の南に位置する御歳遺跡は、奈良時代に繁栄し、五番町遺跡と同時代まで存続していた集落遺跡である。

苅藻川を挟んで御歳遺跡の西岸に位置する神楽遺跡は、五番町遺跡にやや先行する平安時代前半の集落遺跡である。

さらに南に下ると須磨区松野遺跡や長田区二葉町遺跡が存在するが、これらの遺跡はおそらく五番町遺跡と同時期から、さらに後の鎌倉時代まで繁栄した集落遺跡であると考えられる。

これら平安時代後半から中世初頭にかけての集落遺跡は苅藻川流域にそって点在しており、おそらく大和田泊を基点に、湊川と苅藻川に挟まれた沖積平野一体が、平氏全盛時代の摂津南部における先進地域を形成していたと考えられる。

《参考文献》

- 『兵庫県史』 第二巻 兵庫県史編集専門委員会 編 兵庫県 1975年
- 『祇園遺跡 第5次発掘調査報告書』 神戸市教育委員会 2000年
- 『二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・5・7・8・9・12次調査』 神戸市教育委員会 2001
- 『松野遺跡第11～23・25・26・29～31次 水笠遺跡第2・3・5～15・17～21次 発掘調査報告書』 神戸市教育委員会 2002
- 『御歳遺跡VI』 第26・37・45・51次調査 神戸市教育委員会 2003
- 『楠・荒田町遺跡 -神ノ木付属病院構内遺跡-』 兵庫県教育委員会 1997
- 『兵庫津遺跡II(浜崎・七宮地区の調査)』 兵庫県教育委員会 2004
- 『岡説 平家物語』 佐藤和彦 ほか編・著 河出書房新社

第3章 基本層序

1. 基本層序

先述のように、今回の調査地では、中世と古墳時代前期の2つの異なる時期の遺構がひとつの層上に並存していたが、遺構基盤層である黒灰色粗砂層自身には縄文時代晚期の突帯文土器片や弥生時代前期の多条沈線の土器片が含まれていた。

のことから、縄文時代晚期～弥生時代前期に堆積した地層の上に、古墳時代～平安時代の人々が生活していたことがわかる。

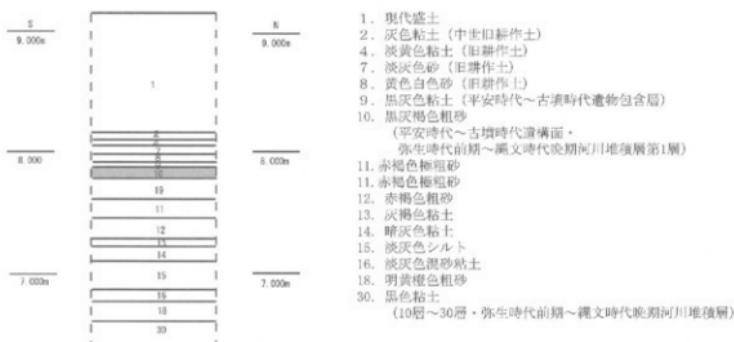
先述のとおり基本的な層序は調査区全体が同質で、遺構基盤層は調査区の全体で確認できるが、調査区の北半分より南半分のほうが遺構基盤層の土壤化が比較的進んでいた。これは遺構の密度が北と南で著しく違いを見せたことに起因すると考えられる。

調査着手前の調査地は、従前の建物を解体して盛上で更地化されていた。

この現代の盛土を最上層（第1層）とし、その下層に2～4層程度の中世の耕作土、その下層に遺物包含層である黒灰色粘土層（第9層）、その直下に遺構面となる黒灰色粗砂層（第10層）、の順に堆積が確認できた（第4図参照）。

調査着手時の現況地盤が標高9.20m前後、遺構基盤層の上面が標高7.80m前後であるが、調査地は六甲山南麓の南に下がる斜面地形上であるため、同じ層上でも北側が南側より若干高い標高となる（第5図参照）。

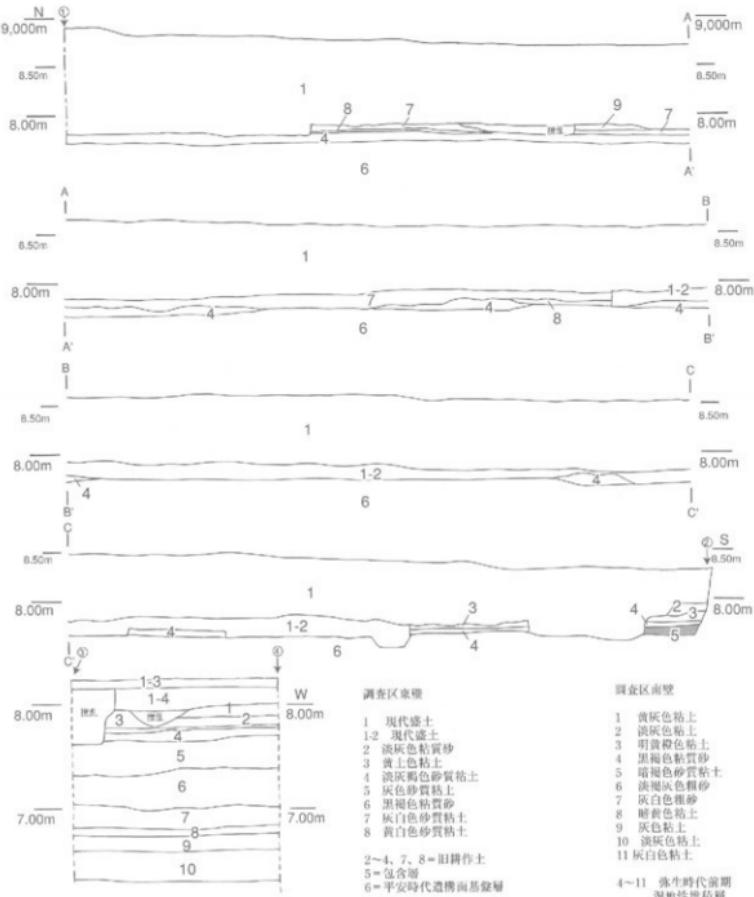
遺構基盤層を含めた以下層は、河川性の堆積層が連続して厚く堆積しており、縄文時代晚期～弥生時代前期の土器が出土する。



第4図 調査地内地層堆積状況 柱状模式図

したがって弥生時代初頭ごろには今回の調査地は河川状地形であったと考えられる。調査地全域でこの河川性堆積層は確認されており、大規模な河川地形であったと考えられる。

以上の点から、今回の調査地では弥生時代初頭まで大きな河川地形だったが、河川が埋没し、古墳時代前期には集落が形成された。その後集落はいったん廃絶したが、中世にふたたび集落が営まれたという時代的変遷が読み取れる。



第5図 調査地 地層堆積状況図

第4章 遺構

1. 遺構の概要

今回の発掘調査対象面積は約430m²であるが、残土等調査の便宜上、調査対象地を4分割して順次調査を行った。まず調査区を南北に2分割し、さらに北半分に関しては東西方向に3分割した。

調査は工事により地面が掘削される深度に応じて行われたもので、工事の影響を受けない深度については、調査対象地内であっても遺跡の存在の有無にかかわらず調査の対象外として扱った。

今回遺構が確認されたのは、すべて調査区南半部であり、調査区北半部には顕著な遺構は認められなかった。この遺構密度の違いは、今回の調査地が集落遺跡の縁辺部にあたることを示している可能性が高い。

調査区北半部は耕作地あるいはムラの外などの、集落における居住区外の領域であると考えられる。

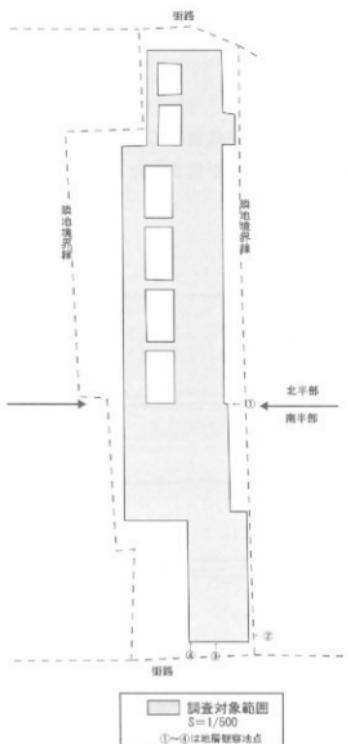
2. 掘立柱建物

5棟の掘立柱建物を確認したが、5棟の建物は互いに重なり合うように柱痕が残されており、5棟すべてが同時に存在したのではなく、時期差があるものと考えられる。

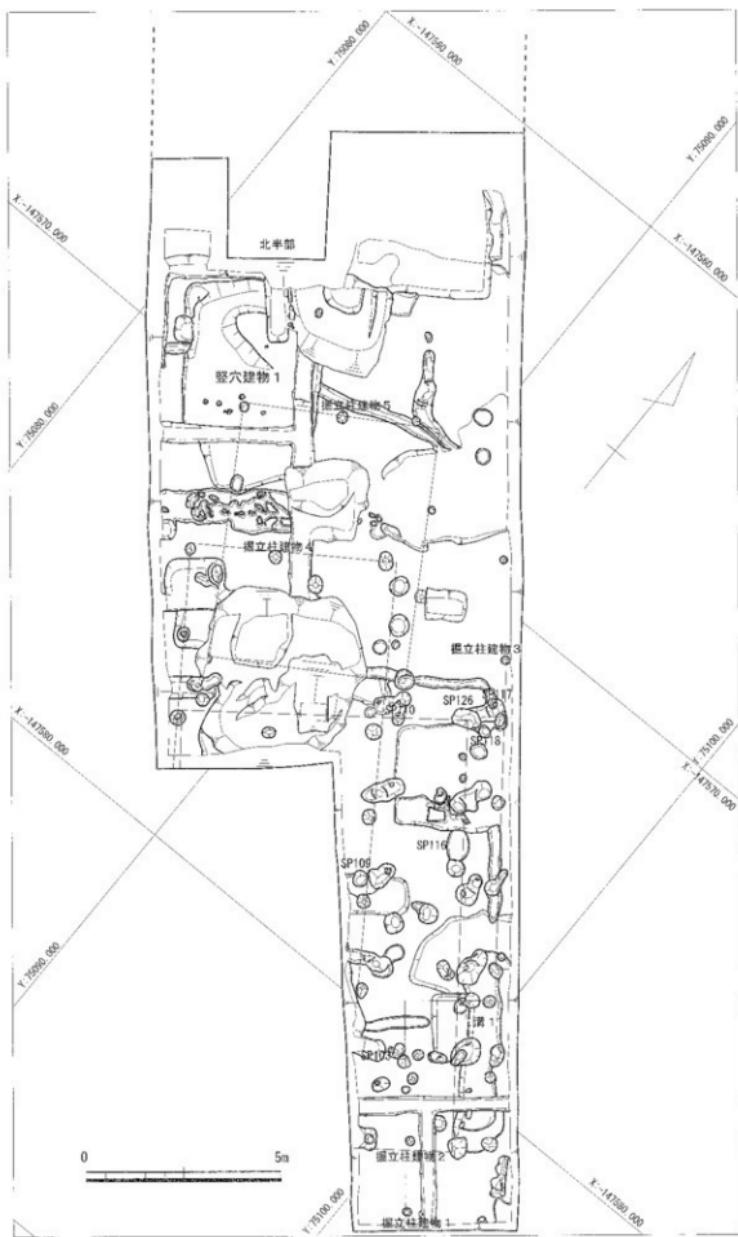
建物間の時期差については次章以下で詳述するが、出土遺物で見る限り、すべての建物が11世紀第4四半期から12世紀初頭におさまると見られ、土器の型式からは明確な時間差が把握できなかった。これらの建物は30年～50年程度の時期幅で、暫時建て替えられた可能性が高い。

柱穴の配列から、建物は5棟と判断したが、南北に細長い今回の調査範囲では、建物の全体を検出することができず、どの建物も一部を確認したものである。

これらの遺構は調査範囲の外にまで続いており、それぞれの全体像は不明である。ただし掘立柱建物5と番号を付けた建物址以外は、どの建物も座標北から約36°西に振るほぼ同一の軸方向で建てられている。このことからこの集落では25～30年程度の期間中定められた方向にそって家が何度か建て替えられていたことがわかる。



第6図 調査区配置図



第7図 調査区南部 遺構平面図

以下に、今回の調査で確認できた範囲内での、それぞれの建物の規模・特徴などを記す。

a. 掘立柱建物 1

調査区の南端で確認されたもので、南北3間×東西1間分を確認した。調査区外の南および東にさらに続いており、実際はさらに大きな建物と考えられる。5棟の中では比較的小さく浅い柱穴を有し、出土遺物も少なかった。

柱穴の規模は約30cm程度で深さは30cm程度のものがほとんどである。あるいは建物ではなく柵列などの可能性も残される。

b. 掘立柱建物 2

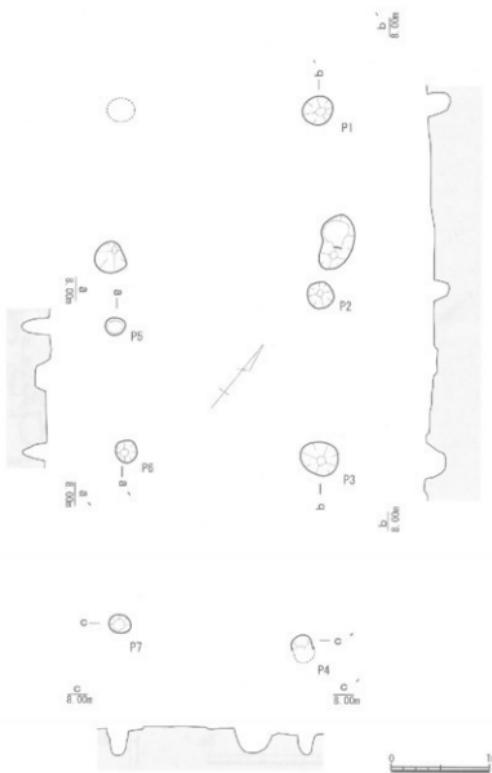
調査区の南端で、掘立柱建物1と一部重なるように確認した。

5棟の中で最も大きく、出土遺物も多かった。柱穴はどれも引き抜いた痕跡を示すように不定形～楕円状にゆがんでおり、深く大きな柱穴痕となって残されていた。

これらの柱穴からは土師器の小皿や須恵器の塊など比較的まとまった量の遺物が出土しており、また、柱をするための礎盤として用いられた石材も一部残されていた。

これら出土した土器のうち何点かは、建物の取り壊しに際し、柱を横倒しにして抜き取り、土師器、須恵器などを意図的に埋めた可能性が高い。建物の解体に伴う祭祀儀礼の可能性が考えられる。

検出した範囲では建物の規模は5間×3間分だが、調査区外の南および東と西にさらに続いている可能性も高く、実際の大きさは不明である。

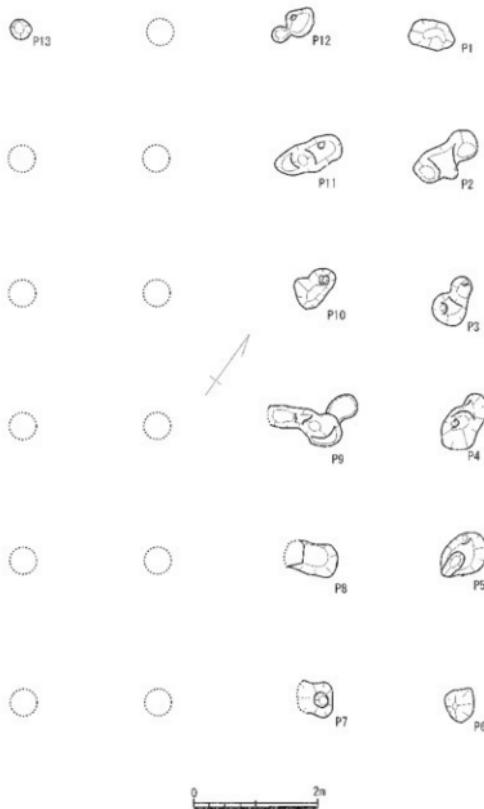


第8図 掘立柱建物1 平面および断面図

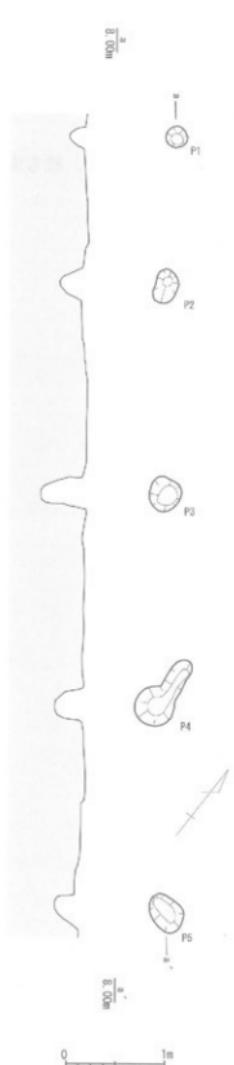
今回調査した範囲内でも77m²以上の床面積となり、実際はそれ以上だろうから、掘立柱建物としては大きい部類といえる。

建物を取り壊した際に、柱を横倒しにして抜き取ったため、正円形の柱穴ではなくいびつな楕円の柱穴となっており、検出時の規模は70~100cm程度前後で、深さも60cm前後のものが多い。

明確に柱の太さをしめす痕跡は確認しづらかったが、建物が大きいことから、柱も太かったため、深い柱穴が残された可能性も考えられる。



第9図 掘立柱建物2 平面および断面図



c. 掘立柱建物 3

調査区の東端で柱穴列を1列分確認したもので、建物の大半は調査区の東側外にさらに続いているので、おそらく掘立柱建物であると考えられる。

柱穴の規模は約30cm程度で深さは40cm程度のものがほとんどである。今回南北4間×東西1間分を確認したが、大半が調査区外となるため全体の大きさは不明である。

実際は今回検出したより大きい建物と考えられる。

あるいは掘立柱建物以外の構造物、たとえば柵列などである可能性も残される。

なお、掘立柱建物2とは、あきらかに柱穴の構造が異なるため、ほぼ同じ並びではあるが別の遺構であると判断した。

d. 掘立柱建物 4

調査区の中央寄りで確認した。

柱穴の規模は約40cm程度で深さは40~50cm程度のものがほとんどである。

南北5間×東西2間分の柱穴を確認したが、調査区外南および西側にさらに続く可能性が高く、実際は今回検出したより大きい建物と考えられる。

正確な規模は不明であるが、今回調査した範囲内でも55m²以上の床面積となり、実際はそれ以上の大きさと思われる。

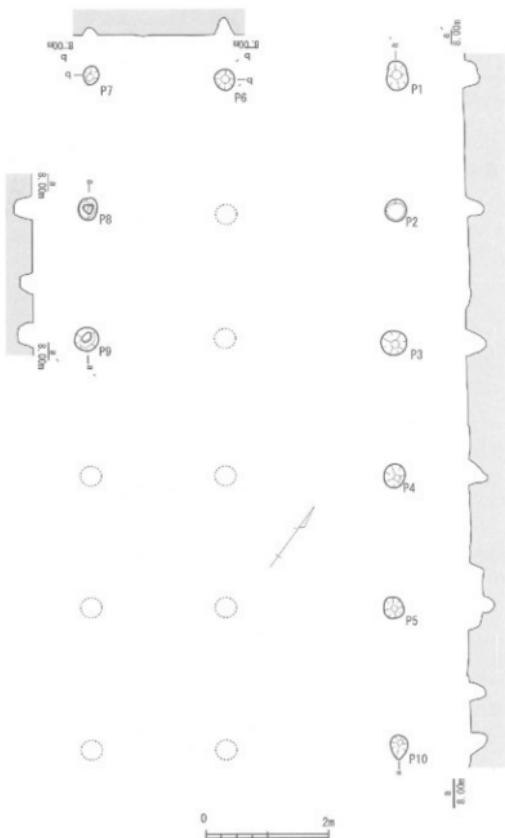
e. 掘立柱建物 5

掘立柱建物4と重なり合うようにして、調査区の中央付近で確認した。

南北3間×東西2間分の柱穴を確認したが、調査区外の東・西側および南側にさらに続いているので、実際はそれ以上の大きさと思われる。

柱穴の規模は約30cm程度で深さは40~50cm程度のものがほとんどである。この建物だけが、他の掘立柱建物群よりわずかに東に軸が傾いており座標北から32° 西に振る軸方向である点が特徴である。

第10図 掘立柱建物3 平面・断面図



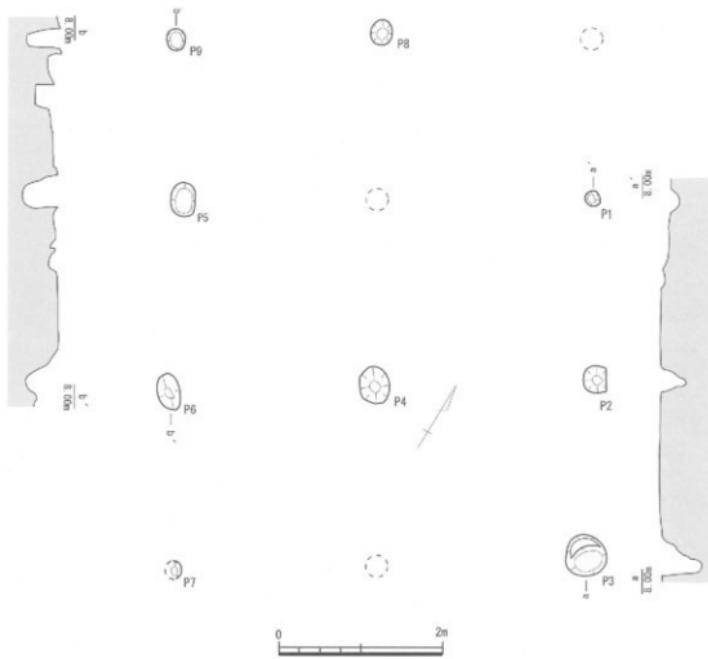
第11図 掘立柱建物 4 平面・断面図

3. 溝 1

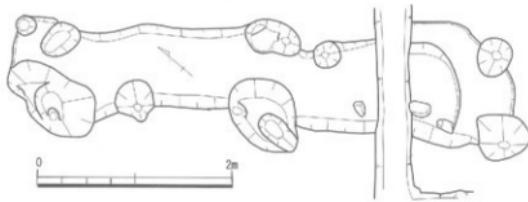
掘立柱建物 2 と重なる場所に、ほぼ同一方向に幅30cm、深さ 5 cm程度の浅い溝で長方形に区画を設けた箇所がある。今回確認した掘立柱建物の雨落溝の可能性も考えられたが、該当する建物が存在しないことから、何か他の用途のものである可能性が高い。

ただし、今回確認できた遺構のうち、この溝に付随する施設等の痕跡は確認できず、正確な機能は不明である。調査区外西側にさらに続くものと思われるが、今回確認した範囲では、南北8.80m程度、東西3.80m以上の規模である。

出土土器は、掘立柱建物と同様の時期で、軸方向も掘立柱建物群と同じである。



第12図 掘立柱建物5 平面・断面図



第13図 溝1 平面図

集落を構成する遺構のひとつと考えられるが、今回の調査ではその機能を特定するに至らなかった。掘立柱建物に比べ出土遺物が示す時期は長期間で、掘立柱建物群と同時期から始まり、さらに建物群がなくなった後まで継続していた可能性が高い。

4. 竪穴建物

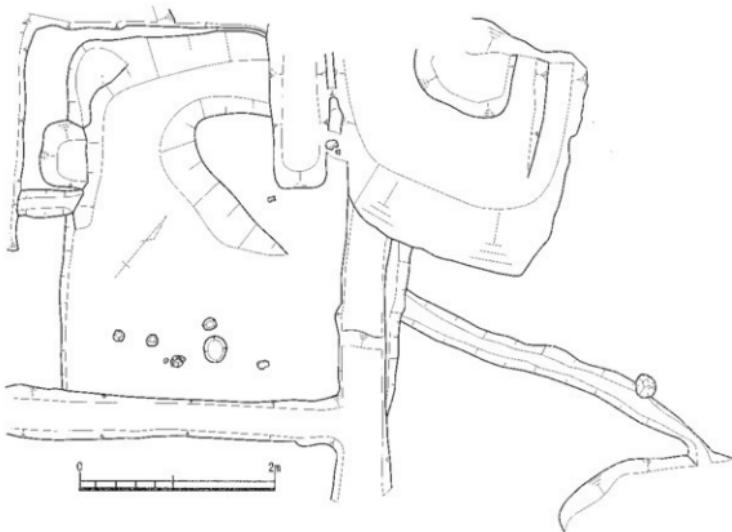
竪穴建物は、南の角を現代の建物の基礎によって破壊されていたため、正確な数値が不明である。残された床面の形状から判断して、床の平面形は4m×4m程度の正方形で、床面積約16m²程度の可能性が高いと考えられる。

検出時床面直上には土器片が數点散乱していたが、これらの土器片から古墳時代前期の住居であることが判明した。

この竪穴住居の床には柱穴が確認できず、周壁溝や炉跡なども確認できなかった。その他この住居址の特徴としは、住居の西壁にあたる場所から、住居内を貫通して東壁側に抜けるように浅く細い溝が付随していたことがあげられる。この溝は、排水溝の可能性も考えられるが、溝底の高さが住居床面より若干高いことから排水機能が望めるかは疑わしい。溝の幅は約40cm、長さは東壁から外へ伸びる部分だけで約3.50mとなる。溝は住居の平面形に対して直交しておらず、やや斜めに北側に向かって延びるものである。西側に出ている溝については、調査区外へ続いたため詳細は不明である。

この溝の正確な機能については今回の調査では解明されなかつたが、あるいは住居に付随するのではなく異なる時代(住居より古い時代)の遺構が偶然同じ位置に重なり合っている可能性もある。

出土遺物が小片のため古墳時代前期であるということ以上には、竪穴建物とこの溝の明確な時期差は確認できなかつた。



第14図 竪穴建物 平面図

5. 小結

今回確認した遺構のうち、古墳時代前期の竪穴建物については、床の形状が正方形であり、掘りこみ式の炉を伴わないこと、用途不明の溝状の施設を伴う可能性があることが特徴として上げられる。また、この建物址には屋根を支える柱の痕跡が確認できなかったことも問題点としてあげられる。

これは本来柱穴が存在しないのではなく、遺構が後世にある程度削平された可能性もあるが、床面が検出可能な残存状態で、柱穴が削平されるとも考えにくい。

方形の床面の形状から今回は竪穴建物として報告するが、あるいはなにか違う性質・機能をもった遺構である可能性も否定できない。

中世の掘立柱建物群は、検出した5棟のそれぞれが接近して、あるいは重なり合って発見されていることから、互いに同時並存していたのではなく、時間差をもって建て替えられたものであることがわかる。

掘立柱建物1と掘立柱建物5、掘立柱建物3は完全に範囲が重なり合っており、この3つの建物は同時に存在し得ないものである。

ただし掘立柱建物1については、正確には柱穴列を1列検出しただけで、建物以外の施設である可能性も考えられる。

掘立柱建物1は、軸方向や柱間が柱穴列の間隔がほぼ同じのため、掘立柱建物5の柱穴列の一番外周である可能性も指摘されるかもしれないが、掘立柱建物1と掘立柱建物5の柱穴の形状には互いに著しい差異があることから、今回は両者を異なる施設の柱穴列であると判断した。

また掘立柱建物4と掘立柱建物5も重なり合っており時期差があることを示す。

掘立柱建物3と掘立柱建物5も柱穴列同士はかなり接近しており、上層を考慮した場合、軒先がぶつかってしまい、同時に存在したとは考えにくい。

これらの掘立柱建物から出土した遺物の示す建物間の時期差については、次章以降に詳述するが、出土遺物で見る限りすべての建物が11世紀後半期から12世紀初頭におさまると見られ、上器の型式からは明確な時間差が把握できなかった。

したがってこれらは30年程度～50年以内程度の時期幅で暫時建て替えられた可能性が高い。

今回検出した掘立柱建物は、どの建物も柱間が5間前後あり、比較的大きめの建物であるといえるが、今回建物址から出土した遺物は、日常雑器的な土師器や須恵器などで、特に特殊な施設であることをうかがわせるようなものは見つかっておらず、民家の可能性が高い。

これまで五番町遺跡では、今回の調査地より東で調査が行われている例が多く、今回の調査地付近の実態はほぼ謎に近かったが、調査の結果、かなり高密度で遺構が残されていることが判明した。一方で調査区北半分については、極端に遺構が少なく、居住域外（田園等耕作地）である可能性が高まった。

第5章 遺構出土上の遺物

1. 概要

今回の調査では遺構および遺構面直上位に堆積する包含層中から若干の土器片、鉄製品などが出土した。その大半は中世の住居址の柱穴から出土したものである。

これらは土中にごみとして混じっていた破片が、柱穴が埋め戻される際に混入したものもあるようが、中には柱穴底に据えられたような状態で土師器小皿が出土したものが複数例、あるいは完形に近い須恵器塊が複数塊まって出土したものなどある。前章に記したようにSB201のように、顕著な柱材の抜きとり痕を示す遺構の状態ともあわせて考えた場合、これらの土器のうちいくつかは、柱の抜き取り＝家屋の解体作業に伴うさやかな祭祀儀礼行為の痕跡と考えられる。

出土した土器のほとんどは、器種としては、土師器および須恵器である。包含層中には、そのほか青磁、縁釉陶器なども混じっており、遺構出土の土器がある時期のものに集中しているのにくらべ、包含層出土の土器が10世紀～13あるいは14世紀ごろまでと広い時期幅を示すものである。

以下に、遺構出土の土器を中心に、遺存状態がよく遺構の年代判定の指標になりうる遺物について詳述する。なお、小皿の分類については次章に詳述する。

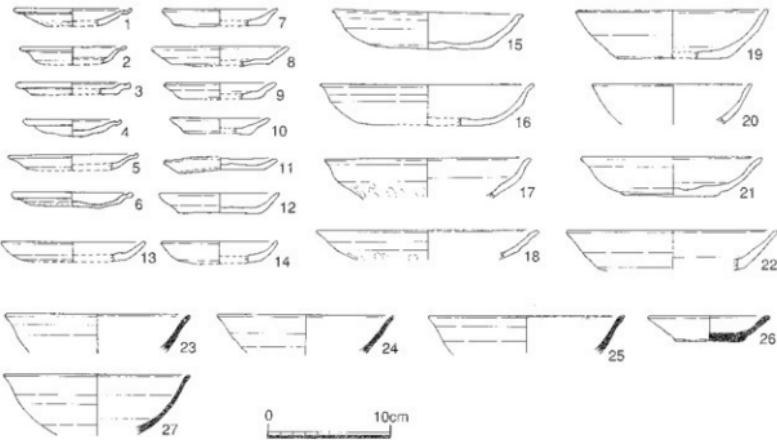
2. 遺構出土の土器

a. 掘立柱建物1および2出土の土器

- 1 掘立柱建物1-1柱穴から出土した土師器小皿である。口縁部の破片で、復元口径は9.5cm、器高は1.4cmを測る。いわゆる「ての字状口縁」を有する小皿aである。内面から外面にかけてナデをほどこし、底部は指オサエが認められる。
- 2 掘立柱建物1-1柱穴から出土した土師器小皿である。口縁部の破片で、復元口径は8.6cm、器高は1.4cmを測る。いわゆる「ての字状口縁」を有する小皿aである。内面から外面にかけてナデが認められる。
- 3 掘立柱建物2-4柱穴から出土した土師器小皿である。口縁部の破片で、復元口径は9.5cm、器高は1.4cmを測る。いわゆる「ての字状口縁」を有する小皿aである。内面から外面にかけてナデをほどこし、底部は指オサエが認められる。
- 4 掘立柱建物2-12柱穴から出土した土師器小皿である。口径は8.0cm、器高は1.4cmを測る。いわゆる「ての字状口縁」を有する小皿aである。内面から外面にかけてナデをほどこし、底部は摩滅のため不明である。
- 5 掘立柱建物2-6柱穴から出土した土師器小皿である。口縁部の破片で、復元口径は10.5cm、器高は1.3cmを測る。いわゆる「ての字状口縁」を有する小皿aである。摩滅のため調査は不明である。
- 6 掘立柱建物2-13柱穴から出土した土師器小皿である。口縁部の破片で、復元口径は9.9cm、器高は1.2cmを測る。

いわゆる「ての字状口縁」を有する小皿 a である。内面から外面にかけてナデをほどこし、底部は指オサエが認められる。

- 7 挖立柱建物 2 - 2 柱穴から出土した土師器小皿である。口縁部の破片で、復元口径は9.4cm、器高は1.4cmを測る。直線的な口縁部がやや外反気味に開く器形を呈するロクロ土師小皿、小皿 b である。底はナデを施している。
- 8 挖立柱建物 2 - 1 柱穴から出土した土師器小皿である。口縁部の破片で、復元口径は11.0cm、器高は1.6cmを測る。直線的な口縁部が開く器形を呈するロクロ土師小皿、小皿 b である。底部に糸切痕が認められる。
- 9 挖立柱建物 2 - 3 柱穴から出土した土師器小皿である。口縁部の破片で、復元口径は9.0cm、器高は1.2cmを測る。直線的な口縁部がやや外反気味に開く器形を呈するロクロ土師小皿、小皿 b である。底部にヘラ切痕が認められる。
- 10 挖立柱建物 2 - 8 柱穴から出土した土師器小皿である。口縁部の破片で、復元口径は8.0cm、器高は1.3cmを測る。直線的な口縁部がやや外反気味に開く器形を呈するロクロ土師小皿、小皿 b である。底はナデを施している。
- 11 挖立柱建物 2 - 1 柱穴から出土した土師器小皿である。口径は9.4cm、器高は1.6cmを測る。直線的な口縁部がやや外反気味に開く器形を呈するロクロ土師小皿、小皿 b である。底部に糸切痕が認められる。全体に焼けひずんでいる。



1, 2 = 挖立柱建物1出土 土師器 小皿
 3~14 = 挖立柱建物 2 出土 土師器 小皿 15~18 = 挖立柱建物 2 出土 土師器 盆
 19~22 = 挖立柱建物 2 出土 土師器 杯 23~27 = 挖立柱建物 2 出土 須恵器 壺
 28 = 挖立柱建物 2 出土 須恵器 小皿

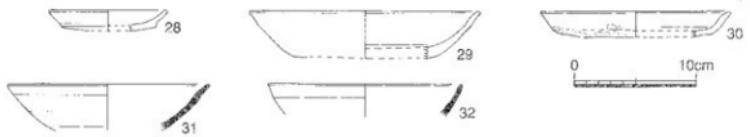
第15図 挖立柱建物 1 および 2 出土土器 実測図

- 12 挖立柱建物 2 - 2 柱穴から出土した土師器小皿である。口径は9.6cm、器高は1.7cmを測る。直線的な口縁部がやや外反気味に聞く器形を呈するロクロ土師小皿、小皿 bである。内面から外面にかけてナデを施すが、底部は摩滅のため不明である。
- 13 挖立柱建物 2 - 1 柱穴から出土した土師器小皿の破片である。復元口径は11.8cm、器高は1.7cmを測る。曲線的に内湾して立ち上がる口縁部のロクロ土師小皿、小皿 cである。内面から外面にかけてナデを施すが、底部に糸切痕が認められる。
- 14 挖立柱建物 2 - 1 柱穴から出土した土師器小皿の破片である。復元口径は9.2cm、器高は1.9cmを測る。曲線的に内湾して立ち上がる口縁部のロクロ土師小皿、小皿 cである。全体に摩滅が進んでおり調整は不明である。
- 15 挖立柱建物 2 - 1 柱穴から出土した土師器皿である。口径は15.8cm、器高は3.3cmを測る。口縁部外面に2段ナデを施し、底部は指オサエで整形されている。口縁端部は外反する。
- 16 挖立柱建物 2 - 1 柱穴から出土した土師器皿の破片である。復元口径は17.6cm、器高は3.3cmを測る。口縁部外面に2段ナデを施し、内面から底部までナデを施す。口縁端部は外反する。
- 17 挖立柱建物 2 - 9 柱穴から出土した土師器皿片である。復元口径は16.7cm、底部が欠損しており、残存器高は3.3cmを測る。口縁部外面に2段ナデを施し、底部は指オサエで整形されている。口縁端部は外反する。
- 18 挖立柱建物 2 - 1 柱穴から出土した土師器皿片である。復元口径は18.0cm、底部が欠損しており、残存器高は2.4cmを測る。口縁部外面に2段ナデを施し、底部は指オサエで整形されている。口縁端部は外反する。
- 19 挖立柱建物 2 - 2 柱穴から出土した土師器杯片である。復元口径は15.8cm、器高は3.9cmを測る。
直線的に立ち上がる口縁で、全体に摩滅が進んでおり調整は不明である。
- 20 挖立柱建物 2 - 4 柱穴から出土した土師器塊片である。復元口径は12.9cm、器高は3.3cmを測る。張りのない腰部で、内面から外面までナデを施す。
- 21 挖立柱建物 2 - 8 柱穴から出土した土師器杯である。口径は14.6cm、器高は3.8cmを測る。外反気味に立ち上がる口縁で、内面から外面までナデを施す。
- 22 挖立柱建物 2 - 11 柱穴から出土した土師器杯片である。復元口径は17.0cm、残存高は3.3cmを測る。直線的に立ち上がる口縁で内面から外面までナデを施す。
- 23 挖立柱建物 2 - 2 柱穴から出土した須恵器塊片である。復元口径は15.0cm、残存高は3.2cmを測る。肥厚しない口縁端部は、やや外反する。
- 24 挖立柱建物 2 - 2 柱穴から出土した須恵器塊片である。復元口径は14.3cm、残存高は3.1cmを測る。肥厚しない口縁端部は、やや外反する。
- 25 挖立柱建物 2 - 12 柱穴から出土した須恵器塊片である。復元口径は16.0cm、残存高は3.2cmを測る。肥厚しない口縁端部は、やや外反する。

- 26 掘立柱建物 2 - 2 柱穴から出土した須恵器皿である。口径は10.0cm、器高は2.1cmを測る。やや肥厚した口縁端部が外反する器形で、底部に糸切痕が認められる。
- 27 掘立柱建物 2 - 4 柱穴から出土した須恵器塊片である。復元口径は15.1cm、残存高は4.9cmを測る。肥厚しない口縁端部は、やや外反する。

b. 掘立柱建物 3 出土の土器

- 28 掘立柱建物 3 - 2 柱穴から出土した土師器小皿片である。口縁部の破片で、復元口径は9.6cm、器高は1.7cmを測る。直線的な口縁部がやや外反気味に開く器形を呈するロクロ土師小皿、小皿 bである。内面から外面にかけてロクロナデを施しているが、底の調整は摩滅のため不明である。
- 29 掘立柱建物 3 - 4 柱穴から出土した土師器杯片である。口縁部の破片で、復元口径は18.6cm、器高は3.8cmを測る。直線的な口縁部がやや外反気味に開く器形を呈する。内面から外面にかけてナデを施している。
- 30 掘立柱建物 3 - 3 柱穴から出土した土師器皿片である。口縁部の破片で、復元口径は15.2cm、器高は2.1cmを測る。直線的に立ち上がる口縁部で、内面から外面にかけてナデを施しているが、内面・外面とも底は指オサエを施している。
- 31 掘立柱建物 3 - 3 柱穴から出土した須恵器塊片である。復元口径は16.3cm、残存高は3.8cmを測る。肥厚しない口縁端部は、やや外反する。
- 32 掘立柱建物 3 - 3 柱穴から出土した須恵器塊片である。復元口径は15.7cm、残存高は2.6cmを測る。直線的に立ち上がる口縁端部を有する。
- 33 掘立柱建物 3 - 3 から出土した土師器小皿片である。口縁部の破片で、復元口径は9.2cm、器高は1.5cmを測る。いわゆる「ての字状口縁」を有する小皿 aである。口縁部は内面から外面にかけてナデをほどこし、底部は内面・外面とも指オサエが認められる。



28 = 掘立柱建物 3 出土 土師器 小皿 29 = 掘立柱建物 3 出土 土師器 杯
30 = 掘立柱建物 3 出土 土師器 皿 31,32 = 掘立柱建物 3 出土 須恵器 塊

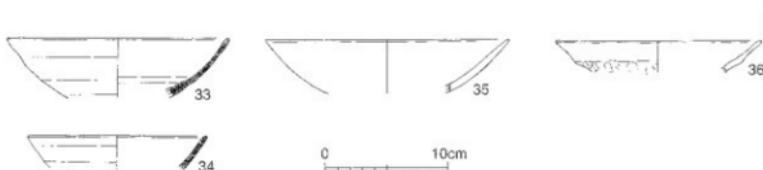
第16図 掘立柱建物 3 出土土器 実測図

c. 掘立柱建物 4 出土の土器

- 33 掘立柱建物 4 - 1 柱穴から出土した須恵器塊片である。復元口径は18.0cm、残存高は4.9cmを測る。
張りのない腰部で、直線的に立ち上がり、肥厚しない口縁端部を有する。
- 34 掘立柱建物 4 - 3 柱穴から出土した須恵器塊片である。復元口径は14.5cm、残存高は2.7cmを測る。
張りのない腰部で直線的に立ち上がり、肥厚しない口縁端部を有する。
- 35 掘立柱建物 4 - 3 柱穴から出土した土師器塊片である。復元口径は19.8cm、残存高は4.4cmを測る。張りのない腰部で、開き気味に立ち上がる口縁端部を有する。内外面ともナデを施す。
- 36 掘立柱建物 4 - 4 柱穴から出土した土師器皿片である。復元口径は16.6cm、残存高は2.6cmを測る。開き気味に立ち上がる口縁部にヨコナデを施すが、内面底部付近は一方向ナデである。外面底部付近は指オサエを施す。

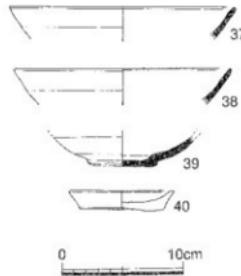
d. 掘立柱建物 5 出土の土器

- 37 掘立柱建物 5 - 2 柱穴から出土した須恵器塊片である。復元口径は18.4cm、残存高は2.7cmを測る。直線的に立ち上がり、肥厚しない口縁端部を有する。
- 38 掘立柱建物 5 - 2 柱穴から出土した須恵器塊片である。復元口径は17.6cm、残存高は3.0cmを測る。直線的に立ち上がり、肥厚しない口縁端部を有する。
- 39 掘立柱建物 5 - 3 柱穴から出土した須恵器塊底部である。底径は5.6cm、残存高は2.4cmを測る。つぶれたような突出部の糸切高台で内面のミコミ部分の凹みは浅い。
- 40 掘立柱建物 5 - 3 柱穴から出土した土師器小皿である。口径は8.8cm、器高は1.6cmを測る。直線的な口縁部がやや外反気味に聞く器形を呈するロクロ土師小皿、小皿 b である。口縁部は内面から外面にかけてヨコナデを施すが、内面底部付近は一方向ナデである。底部はヘラ切痕を有す。



33,34=掘立柱建物 4 出土 須恵器 塊
35=掘立柱建物 4 出土 上師器 塊
36=掘立柱建物 4 出土 上師器 杯

第17図 掘立柱建物 4 出土土器 実測図

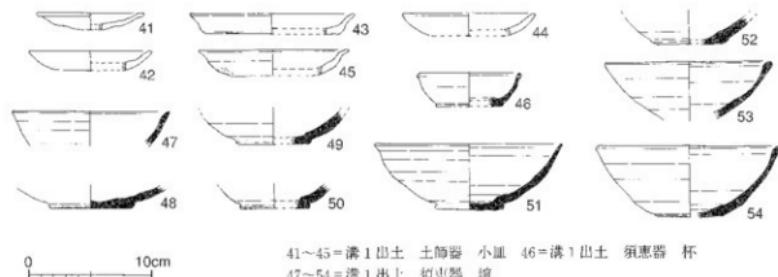
- e. 溝1出土の土器
- 
- 41 土師器小皿片である。口縁部の破片で、復元口径は8.6cm、器高は1.4cmを測る。いわゆる「ての字状口縁」を有する小皿aである。摩滅のため調整が不明である。
- 42 土師器小皿片である。口縁部の破片で、復元口径は10.8cm、器高は1.8cmを測る。曲線的に内湾して立ち上がる口縁部のロクロ土師小皿、小皿cである。
- 口縁部は内面から外面にかけてロクロナデを施すが、底部に糸切痕が認められる。
- 43 土師器小皿片である。口縁部の破片で、復元口径は13.2cm、器高は1.7cmを測る。直線的な口縁部がやや外反気味に開く器形を呈するロクロ土師小皿、小皿bである。口縁部は内面から外面にかけてヨコナデを施すが、内面底部付近は一方向ナデである。底部はヘラ切痕を有す。

- 44 土師器小皿片である。口縁部の破片で、復元口径は10.8cm、器高は1.8cmを測る。曲線的に内湾して立ち上がる口縁部のロクロ土師小皿、小皿cである。口縁部内面はヨコナデを施すが、外面は、摩滅のため不明である。
- 45 土師器皿片である。口縁部の破片で、復元口径は12.2cm、器高は2.1cmを測る。口縁部は外反気味に開く器形を呈し、内面から外面にかけてヨコナデを施すが、内面底部付近は一方向ナデである。底部は指オサエの後ナデを施す。
- 46 小型の須恵器杯片である。復元口径は8.4cm、器高は2.8cmを測る。やや外反気味に開く口縁部で、内面から外面にかけてナデを施すが、底部は糸切痕を有す。
- 47 須恵器塊片である。復元口径は12.6cm、残存高は2.9cmを測る。張りのない腰部で、直線的に立ち上がり、肥厚しない口縁端部を有する。
- 48 須恵器塊底部である。復元底径は6.7cm、残存高は1.6cmを測る。つぶれたような突出部の糸切高台で、内面のミコミ部分の凹みは浅い。
- 49 須恵器塊底部である。復元底径は5.8cm、残存高は2.4cmを測る。つぶれたような突出部の糸切高台で、内面のミコミ部分の凹みは浅い。
- 50 須恵器塊底部である。復元底径は5.8cm、残存高は1.6cmを測る。底部は摩滅が進んでおり不明である。つぶれたような突出部の糸切高台がわずかに残り、内面のミコミ部分の凹みも極浅い。
- 51 須恵器塊である。口径は15.5cm、残存高は5.4cmを測る。腰部の張りはなく、肥厚しない口縁端部を有する。つぶれたような突出部の糸切高台で、内面のミコミ部分の凹みも浅い。

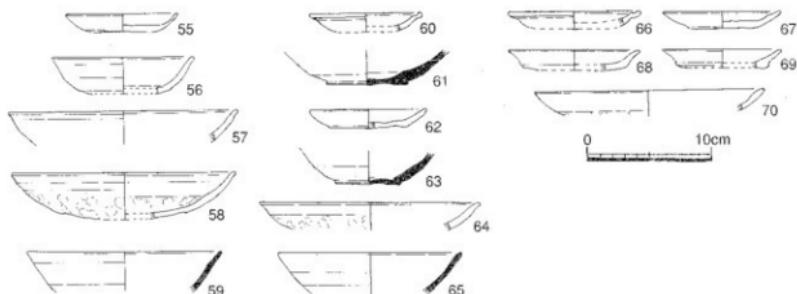
- 52 須恵器碗底部である。復元底径は5.4cm、残存高は1.8cmを測る。底部は糸切痕を有す。高台および内面のミコミはほとんど認められない平底である。
- 53 底部の欠損した須恵器碗である。口径は13.4cm、残存高は4.8cmを測る。腰部の張りはなく、肥厚した口縁端部が内湾する。
- 54 須恵器碗である。口径は14.8cm、残存高は5.9cmを測る。腰部の張りはなく、肥厚した口縁端部が内湾する。高台および内面のミコミはなく平底である。

f. ピット出土の土器

- 55 S P126出土の土師器小皿である。口径は9.0cm、器高は1.5cmを測る。曲線的に内湾して立ち上がる口縁部のロクロ土師小皿、小皿cである。口縁部内外面はヨコナデを施すが、底部は摩滅のため不明である。



第19図 溝1出土土器 実測図



第20図 ピット出土土器 実測図

- 56 S P 126出土の土師器皿片である。復元口径は11.3cm、器高は3.1cmを測る。外反気味に開く口縁部外面に、2段のヨコナデを施す。底部内外面は指オサエを施す。
- 57 S P 126出土の土師器皿片である。復元口径は18.5cm、器高は2.6cmを測る。開く口縁部で外面にヨコナデを施す。
- 58 S P 126出土の土師器皿片である。口径は18.2cm、器高は3.9cmを測る。
直線的に開く口縁部外面に、2段のヨコナデを施す。
底部内外面は指オサエを施す。
- 59 S P 126出土の須恵器塊片である。口径は15.8cm、残存高は3.4cmを測る。腰部の張りはなく、肥厚しないやや外反する口縁端部を有する。
- 60 S P 118出土の土師器小皿片である。復元口径は9.0cm、器高は1.5cmを測る。いわゆる「ての字状口縁」を有する小皿 a である。口縁部外面ともナデを施す。
- 61 S P 118出土の須恵器塊底部である。底径6.6はcm、残存高は3.0cmを測る。つぶれたような突出部の糸切高台で、内面のミコミ部分の凹みは浅い。
- 62 S P 122出土の土師器小皿片である。復元口径は9.4cm、器高は1.5cmを測る。曲線的に内湾して立ち上がる口縁部のロクロ土師小皿、小皿 c である。口縁部内外面はヨコナデを施すが、底部は糸切痕を有す。
- 63 P 122出土の須恵器塊底部である。復元底径5.2はcm、残存高は2.6cmを測る。つぶれたような突出部の糸切高台で、内面のミコミ部分の凹みは浅い。
- 64 S P 110出土の土師器皿片である。口径は17.9cm、器高は2.2cmを測る。開き気味の口縁部外面にヨコナデを施す。底部外面は指オサエを施す。
- 65 S P 110出土の須恵器塊片である。口径は14.8cm、残存高は3.4cmを測る。腰部の張りはなく、肥厚しないやや外反する口縁端部を有する。
- 66 S P 103出土の土師器小皿片である。復元口径は10.5cm、器高は1.2cmを測る。いわゆる「ての字状口縁」を有する小皿 a である。口縁部外面ともナデを施す。
- 67 S P 116出土の土師器小皿片である。復元口径は9.5cm、器高は1.4cmを測る。直線的な口縁部がやや外反気味に開く器形を呈するロクロ土師小皿、小皿 b である。全体に摩滅が進んでおり、調整は不明である。
- 68 S P 117出土の土師器小皿片である。復元口径は10.7cm、器高は1.7cmを測る。直線的な口縁部がやや外反気味に開く器形を呈するロクロ土師小皿、小皿 b である。口縁部内外面はヨコナデを施すが、内面底部付近は一方向ナデである。底部はヘラ切痕を有す。
- 69 S P 117出土の土師器小皿片である。復元口径は9.4cm、器高は1.5cmを測る。直線的な口縁部がやや外反気味に開く器形を呈するロクロ土師小皿、小皿 b である。全体に摩滅が進んでおり、調整は不明である。
- 70 S P 117出土の土師器皿片である。口径は18.5cm、器高は1.9cmを測る。開き気味の口縁部外面にヨコナデを施す。底部外面は指オサエを施す。

g. 穴窓建物出土の上器

中世の遺構以外に、穴窓建物 1 からも土師器がわずかに出土している。これらは布留式とよばれる範疇の時期を示すことから、この建物址は古墳時代前期のものであると考えられる。

71 土師器の壺である。底部が欠損しており、復元口径は10.4cm、残像高は4.5cmをはかる。摩滅が進んでおり、調整等は不明である。

72 土師器の鉢である。底部が欠損しており、復元口径は14.3cm、残像高は6.5cmをはかる。摩滅が進んでおり、外面の調整は不明であるが、体部内面は横方向のハケを施す。全体に焼けひずんでいる。

3. 上器以外の出土遺物

土器以外に、掘立柱建物 2 - 2 柱穴から馬歯が、溝 1 からは鉄鎌が 1 点づつ出土している。馬歯については、京都大学大学院 丸山真史氏の鑑定とご教示による。

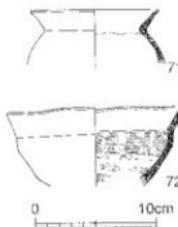
73 掘立柱建物 2 - 2 柱穴から出土したウマの右上顎臼歯 (M_3) である。

歯冠最大長25mm、歯冠最大幅21mmを測る。歯根を欠損するが、残存する歯冠最大高は56mmを測る。

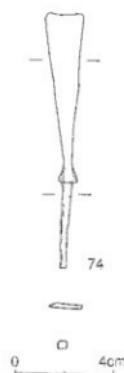
以上の結果、 M_3 の萌芽年齢が 2 ~ 3 歳であること、残存する歯冠最大高の数値より、6 歳未満の幼~若年馬の遺存体であることが推測される。(写真図版 P. L. 7 写真32)。

74 溝 1 から出土した鉄鎌である。方頭斧簡鎌とよばれる形態のもので、長10.45cm、厚さ0.3cmを測る。

溝 1 から出土していることから中世の鎌と思われる(写真図版 P. L. 7 写真29)。



第21図 穴窓建物出土土器 実測図



第22図 溝1出土方頭斧簡鎌実測図

4. 遺構面以下層の出土遺物

遺構面を形成する堆積層より下層は、第3章に記したように湿潤性堆積層が標高6.50m付近まで堆積していたが、この層からは弥生時代前期の多条沈線を有する土器と突帯文土器が共伴して出土した(写真図版 P. L. 8 写真38)。

第6章 考察

今回の調査では、中世掘立柱建物群から前章に記したような一定の時期幅の土器が出土した。そのほとんどは須恵器・土師器類であり、どれも普遍的に認められるもので、当時もっとも一般的な器種、いわゆる日常雑器であると考えられる。

本章では今回の調査で出土した土器類のありかたから西摂・東播磨地方の中世遺跡における、日常雑器の様相の一端がうかがえるものとしてつたない考察を加えておく。

1. 器種構成

掘立柱建物群の柱穴から出土した遺物は、大半が破片で、須恵器あるいは土師器のいずれかである。

まず須恵器を器種別に分類すると塊か小皿の2種のどちらかとなる。

次に土師器を分類すると小皿、皿、塊、杯、の4種のいずれかとなる。

小皿と皿の定義については、ここではおおむね直径が10cm前後のものを「小皿」、直径が15cm前後のものを「皿」としておく。

当然その他の器種も存在し、もっとバリエーション豊かな器種構成が本来の中世日常雑器の姿ではあろうが、今回の調査では細片のため上記以外の器種は明確には確認できなかった。また出土遺物の大半が柱穴の埋め戻しに伴ったものであること、器種のバラエティを狄めている原因のひとつと考えられる。

2. 型式と年代

a. 須恵器塊

今回の調査で出土した須恵器塊については、従前の東播磨・西摂地域における中世須恵器の編年体系のなかで理解できるものである。

本稿では森田稔¹¹、菅本宏明¹²がそれぞれに提案している編年案によっている。

両者の案はほぼ同様の傾向を示すが、ここでは森田案をうけて初期段階の?における型式変化をより細分して提案している菅本案を運用し、別表1にまとめた。

さらにこの表で示す型式変化と比較して、本調査で出土した須恵器塊に独自にⅠ期・Ⅱ期と称する2段階の型式差を与えた。

今回の調査で出土した須恵器塊のⅠ期・Ⅱ期の段階に相当する各遺跡の資料に、実年代として菅本はそれ

	型式	特徴
I期		<ul style="list-style-type: none"> 形態化しつぶれた高台 浅く不明瞭なミコミの凹み 内凹する体部と外反し肥厚しない口縁
II期		<ul style="list-style-type: none"> 高台・ミコミの凹みの消失 内湾する体部と肥厚した口縁

第23図 五番町遺跡第12次調査出土須恵器塊型式変化

それ11世紀第4四半期と12世紀初頭をあてていると考えられるが、詳細は後述する。

本調査で出土した須恵器壺については、すべてこの2つの型式の中で理解できる時期幅である。本調査でいうⅠ期の須恵器壺の特徴としては、底部は高台の形骸化が始まり、つぶれたような突出部の糸切高台で、内面のミコミ部分の凹みもやや不明瞭である。体部の沈線は完全に消失している。

ミコミ、高台とともに他遺跡にみる前型式のものより不明瞭で形骸化してはいるが、まだ確実に残存しているのが、この時期の特徴である。腰部は張りがなく、口縁端部は、やや外反し鋭い。

Ⅱ期になると高台は失われ平底化しており、ミコミ部の凹みも認められない。口縁部がかなり肥厚化しているが張りのない腰部から内湾気味に立ち上がるるもので、他遺跡の後型式にみるような開く感じはまだ見られない段階である。

なお、今回の調査の出土遺物のうち、Ⅰ期としたものの中には、正確にはⅡ期との中間形態を示す傾向のもの、純粹なⅠ期と判断しがたいが完全にⅡ期になりきってないのではと思うものも存在した。

しかし大半が細片であるため、判定に苦慮したものが多い。これらは今回、口縁部肥厚化の程度からⅠ期として分類した。

実年代	森田案	菅本案	五条町遺跡12次調査	長田区河辺遺跡	特 徴			
					高台	ミコミ	口縁部	
900								
1000		神奈SD02						
1050								
1100	第 一期 <small>前 中期 後 中期 後 期</small>	上小名HSK836 対中瀬4 長田神社境内ST02	時 期 第 一 期	調 査 12次 五条 町 遺 跡	剪 壁 高 台 建 築 物 SD101 5/118,126	剪 壁 高 台 建 築 物 SX301 (五条町遺跡12次調査) 長田遺跡19次SX01	明瞭 あり かわ ら な し	肥 厚 し め で あ る な し
1150	第 二期	長田神社境内SE02						
1200	第 三期	長田神社境内SE04						
1300	第 四 期 <small>前 中期 後 中期 後 期</small>				紙 纏 高 台 建 築 物 SX07			

※ 森田案=注1文献 菅本案=注2文献を参照。

※2 上記表中のグレーで示した部分に関してはその前型式と後型式の中間形態的型式が存在すると考えられるが、今回の調査では出土遺物数の少なさから明確に把握し判断することができなかった。

表1 六甲南麓 従前の編年案との対応関係

もしこのⅠ期とⅡ期の中間形態が正確に判定できたならば、今回検出した掘立柱建物群の時期的前後関係をもう少し細かく検証できたと思われる^⑨。

以上の点を単純に図式化すると、Ⅰ期からⅡ期への型式変化は

- ① 鋭く、外反気味の端部から肥厚化した端部へ
 - ② 不明瞭ながらも確実に高台とミコミ部が認められる底部から、平底でミコミが消失した底部へ
- の2大特徴の変化としてとらえられる。変化しない点としては、どちらも腰部に張りを失ってはいるがまだプロポーションとしては内湾している点があげられる。

b. 土師器皿・小皿

一方土師器皿・小皿については、いわゆる「京都系」と称される、京都産の土師皿を模倣して近在で生産された形態のものと、在地系の形態のものが混在している。

本稿では「京都系」土師皿・小皿については、伊野近富の京都産土師皿の編年によっている^⑩。今回の調査で出土した「京都系」土師皿は、伊野の分類でいうAタイプに近いものである。乳白色の色調を示し、精細な胎土のものがほとんどで、口縁部外面に2段ナデを施し、底部は指オサエで整形されている。

伊野の編年では口縁端部は外反するものから直立化するものへ変化していくが、この2段ナデの土師皿口縁部の変化に対し、伊野は11世紀末から12世紀初頭の実年代をあげている。

今回の調査地で出土した京都系土師皿のうち、口縁部が直立した段階のものは認められず、外反する段階にとどまる時期のものである。

土師小皿については、次節に詳述した「小皿a」形態のものが「京都系」と称されるものである。小皿aは、いわゆる「ての字状口縁」とよばれるもので、伊野のいうBタイプの土師皿に相当する。

「ての字状口縁」そのものは伊野編年によると10世紀に登場し、12世紀初頭まで存続する形態である。

この形態の上師小皿については器厚が2mm程度の薄いものから4mm程度の厚いものへの型式変化が伊野により指摘されているが、本調査では4~5mm前後の器厚のもののみが認められる。

3. 土師小皿の形態分類

土師器の小皿に関しては、形態・製作技法などから以下のように分類可能である。

小皿a 手づくね製法による。口縁部を玉縁状に整形したいわゆる「ての字状口縁」と呼ばれるもので、外面底部は指オサエ整形が顕著ででこぼこしている。本遺跡では、指オサエは外面に顕著だが、内面に観察できるものもある。

器壁は厚く、4~5mm前後を計ものがほとんどである。乳白色の色調を示し、精細な胎土のものが多い。いわゆる「京都系」の土器で、伊野分類「土師皿Bタイプ」にあたる。

- 小皿b ロクロを用いて整形され、ロクロ土師皿と呼ばれるものである。直線的な口縁部がやや外反気味に開く器形を呈する。底はヘラ切のあと軽くナデを施しているが、ヘラ切痕が明瞭に残る。同じ形態でも糸切底のものもある。暗橙色や暗黄土色の色調で、やや粗い胎土、アカグサレと呼ばれる1~2mm前後の微細粒が多く含まれている場合が多い。
- 小皿c ロクロ土師皿で、曲線的に内湾して立ち上がる口縁部のものである。今回出土したものの大半が、摩滅で底部の観察が不可能なものが多かったが、わずかに糸切痕のあるものが観察できた。暗橙色や暗黄土色の色調で、やや粗い胎土、アカグサレと呼ばれる1~2mm前後の微細粒が多く含まれている場合が多い。

4. 共伴関係

以上のように、本調査では在地系土器と京都系土器の混在する土器様相であることがわかる。

したがって須恵器塊に代表される在地系土器と京都系土器の型式変化が重なり合うところが本遺跡の時期を示すと考えるが、在地系土器を

	形態	特徴		
		成型	口縁部	その他
小皿a		手捏	スピオサム	京都系 いわゆる“ての小皿口縁”
小皿b		ロクロ	ヘラ切 あるいは 糸切	在地系
小皿c		ロクロ	糸切	在地系

表2 土師小皿 分類案

ベースに、京都系土器の変化を追認するといったほうが正しいかもしれない。

遺構ごとにそれらの共伴関係を観察すると、I期の須恵器塊と、2段ナデで外反する口縁部を有する土師皿、および土師小皿a、b、cが共伴関係にある。

出土量が少なめの本調査では、これらはどの遺構でも常にすべての器種がそろっているわけではなく、いずれかを欠きながら他のいずれか同士が共伴した状態で出土していることがほとんどである。

唯一掘立柱建物2だけが、この共伴関係のすべてを満たしており本調査区の遺構出土遺物の共伴関係の基本要素を示している。

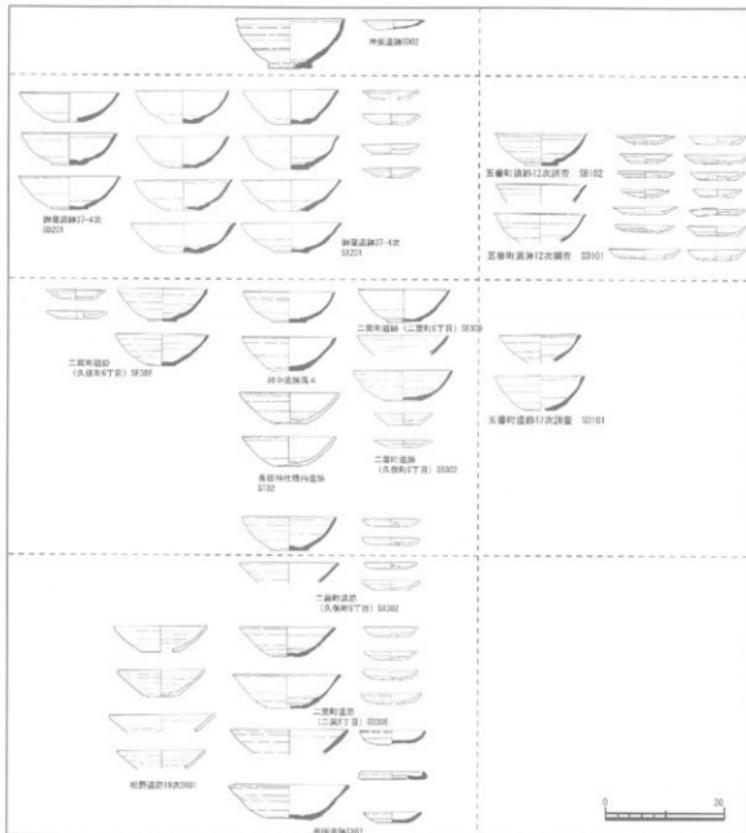
I期の須恵器塊におけるこの共伴関係の範囲内で遺物が出土していると考えられる遺構は、掘立柱建物1、掘立柱建物2、掘立柱建物3、掘立柱建物5、S P 126、S P 118である。その後型式となるII期の須恵器塊に対しての共伴関係については、II期の須恵

器塊を確実に出土している遺構が溝1のみであることから、この遺構でしか知ることができないが、溝1はⅠ期、Ⅱ期両方の須恵器塊が混在しておりⅡ期の須恵器塊に対する純粋な共伴関係を正確に知ることは不可能である。

ちなみに溝1からは須恵器塊Ⅰ期、Ⅱ期、2段ナデで外反する口縁部を有する土師皿、および土師小皿a、b、cがすべて出土している。

また掘立柱建物4については、指標となる須恵器塊はⅠ期を示しているが、土師小皿は出土していない。その他の遺構については、共伴関係の不明瞭な単独に近い状態でそれぞれに上器が出土している。

今回Ⅰ期としてまとめた須恵器塊が先述の仮説どおりさらに2段階に型式変化するものであれば、たとえば「ての字」との共伴関係などが明確化する可能性もある。



第24図 六甲南麓 中世集落遺跡出土須恵器塊との対応関係

5. 実年代および同時期の周辺集落

本調査でⅠ期とした須恵器塊は、従前の東播磨・西摂地域の中世須恵器編年体系における森田案でいう第Ⅰ期第1段階と第2段階の中間にあたるものである。菅本の細分案では上小名田遺跡SK636、実年代で11世紀第4四半期に該当すると思われる。

Ⅱ期とした須恵器塊は菅本案では対中遺跡溝4出土に該当するか、わずかのそれに遅れると思われる。対中遺跡溝4出土須恵器塊には「ての字状口縁」が共伴し、実年代で12世紀初頭をあてている。「ての字」終末期である。

森田案でいう第Ⅱ期第1段階がこれにつづくと思われる。実年代で12世紀中葉があてられている。この時期西摂では「ての字」はすでに見ることはできない。

今回Ⅰ期とした須恵器塊には「ての字」が共伴することを確認したが、Ⅰ期の示す時間幅が、さらに2分割できるかは証明できず、この地域における「ての字」の消失段階も絞り込むことはできなかった。「ての字状口縁」の上師小皿と東播系須恵器塊の組み合わせは西摂特有の共伴関係であるが、これらを整理すると、西摂地域の中世須恵器編年体系の細分化による補完が可能となる。これらの型式変化における実年代は30年程度～50年未満くらいの時間幅に収まるものであると考えられる。

本調査で言うⅠ期・Ⅱ期の段階に併行する須恵器塊を出土する近在の遺跡としては長田神社境内遺跡および二葉町遺跡、御藏遺跡などがあげられる。これら遺跡における須恵器塊の様相は、今回の五番町遺跡の調査結果と近似しており、11世紀末～12世紀にかけてこれらの集落は同時並行で存在したものと思われる。

Ⅱ期の後型式となる須恵器塊を出土する近在の遺跡としては二葉町遺跡、長田神社境内遺跡、松野遺跡、祇園遺跡などが上げられる。土師器小皿の型式もそれを追認しております。祇園遺跡では「ての字状口縁」の出土が認められなくなった段階である。実年代で12世紀第4四半期があてられている。

Ⅰ期の前型式となる段階の須恵器塊を出土する近在の遺跡としては神楽遺跡があげられる。神楽遺跡の実年代としては10世紀末があてられており、祇園遺跡および神楽遺跡と、五番町遺跡その他周辺の同時代集落との時間差は大きい。

なお御藏遺跡では本調査のⅠ期・Ⅱ期須恵器塊とほぼ同時期の須恵器塊を出土する溝などの構造が確認されているが、御藏遺跡の主体は奈良時代～平安時代と見られている。

6. 結語に代えて

本遺跡では、須恵器塊に代表される在地産土器と、土師皿に代表される京都産の土器を模倣したような「京都系」と呼ばれる土器とが混在して出土していることは先述のとおりである。

また土師皿・小皿に限っても、京都系のものと在地産のものとが混在していたが、このような土器様相は六甲南麓の中世遺跡においては普遍的に見られる現象である。

これは日常雑器である土器の消費地として、京都系の流通経路と在地系の流通経路が並存して、六甲南麓地域に食器類を供給していたということを意味する。

今回の調査で、東播系須恵器塊とあわせて時間的指標となるもののひとつに京都系譜の土器である「ての字状口縁」の土師小皿があげられるが、伊野によると京都においては12世紀初頭を過ぎると「ての字状」は見られなくなる。

京都での型式変化は東播磨・六甲南麓でもおおむね同様にあてはまると思われ、「ての字」の有無が時間的前後関係のひとつの指標となりうる可能性はある。今回の調査で出土した、3形態の土師小皿のうち、12世紀初頭を最後に姿を消すのは「ての字状口縁」のみである。ほかの2種の在地系ロクロ土師小皿は中世を超えて近世まで存続していく。ただし紙面遺跡の例から、その他の京都系土師小皿は12世紀を通して六甲南麓に流通していたと見られ、「ての字」の終焉=京都産流通経路の終焉ではない。

本調査でⅡ期とした須恵器塊には「ての字」が伴わず、Ⅰ期のものにのみ共伴する可能性が高い。「ての字」とⅠ期須恵器塊という組み合わせが、六甲南麓中世集落における11世紀4四半期から12世紀初頭という25年程度の特定の狭い時期幅を示すものと考えてよいのではないかと思われる。

京都での生産の消長と西摂での京都系土師小皿の消長との間に時間差はない可能性が高いが、今回の調査地では出土遺物の絶対量が少なすぎ、単純で数量的根拠に支えられた傾向を読み取ることは不可能と考える。他遺跡での同時代資料の集成などをまって改めて精密に検討すべき課題と思われる。

このような京都系と在地系土器の共伴関係は、11世紀末から12世紀において六甲南麓地域が福原京・大和田泊に代表されるような、京都に根拠地を置いた平氏の進出が著しい土地柄であり、京と西国の中継地でもあったことに起因すると思われる。おのずと京都との文物の往来が開かれていた結果ととらえられるだろう。

「ての字状口縁」が同じ東播系須恵器塊の分布圏内であっても西摂に流通しながら、東播磨には認められないことは周知である。この両者の組み合わせは畿内先進地を擁する西摂に特有の組み合わせであると考えられる。

五番町遺跡を含めた長田区周辺の中世集落遺跡は、これら畿内先進地間の中間地点に当たり、式内社である長田神社にも近い。こういった地理的環境も当該地域中世集落における土器流通と消費のありかたを形成した要因であろう。

《注》

- (1)森田 稔 「中世須恵器」「廻説 中世の土器・陶磁器」 1995 中世土器研究会 編 真陽社
- (2)菅木 宏明「東播系須恵器出現期における攝播国境地域の土器様相」
『瀬見 浩先生追憶論集 考古論集』 1993
- (3)丹治 康明「東播系須恵器について」「中世土器の基礎研究」 1985 中世土器研究会 において丹治が
11世紀末として提案している塊の形態がそれに該当すると思われるが、資料数が少ないため今回は、正
確な形態の変化を確認することはできなかった。
- (4)伊野 富近「土師器皿」「概説 中世の土器・陶磁器」 1995 中世土器研究会 編 真陽社

写 真 図 版



1. 第1造構面 中世掘立柱建物群 掘出状況（北から）



2. 摂立柱建物 3～5 検出状況（北から）



3. 壇穴建物（SH101）検出状況（南から）



4. 挖立柱建物 1 および 2 検出状況（南から）



5. 挖立柱建物 2 土器出土状況（南から）



6. 挖立柱建物 4 土器出土状況（南から）



7. 挖立柱建物 2 土器出土状況（南から）



8. 調査区北半第1遺構面 検出状況（北から）



9. 調査区北半第1遺構面 検出状況（北から）



10. 調査区北半第1遺構面 検出状況（南から）



11. 調査区西壁 地層堆積状況



51



54

12. 溝 1 (SD101) 出土須惠器碗

13. 溝 1 (SD101) 出土須惠器碗



53



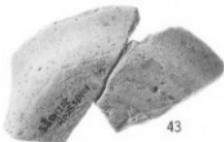
46

14. 溝 1 (SD101) 出土須惠器碗

12. 溝 1 (SD101) 出土須惠器杯



45



43



47

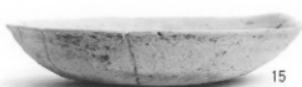


49

須惠器
蓋
101

56

16. 溝 1 (SD101) 出土土器



15



6

17. 挖立柱建物 2 (SB102) 出土 土師器皿



16

18. 挖立柱建物 2 (SB102) 出土 土師器皿



11

20. 挖立柱建物 2 (SB102) 出土 土師器皿



12

21. 挖立柱建物 2 (SB102) 出土 土師器皿



19

19. 挖立柱建物 2 (SB102) 出土 土師器皿



27

22. 挖立柱建物 2 (SB102) 出土 土師器皿



8



22



9



26



21

24. 挖立柱建物 2 (SB102) 出土土器

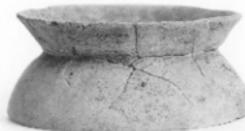


40

25. 挖立柱建物 5 (SB105) 出土 土師器皿



73



71

31. 挖立柱建物 2 出土馬齒 32. 包含層出土 土師器



26. 壘穴建物 (SH101) 出土 土師器甕



72



33. 包含層出土 瓢材

27. 壘穴建物 (SH101) 出土 土師器鉢



28. 包含層出土 須恵器碗

34. 满 3 出土 石鎌

35. 濕地堆積層出土 刀器



74

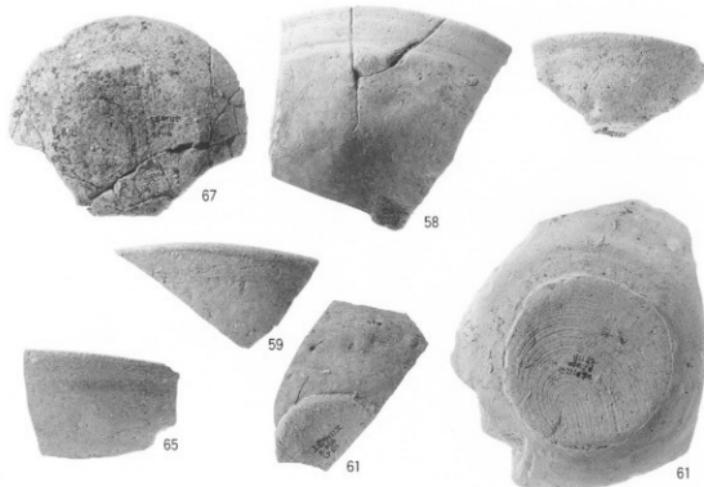


30. 挖立柱建物 1 出土土器



36. 包含層出土 土器

29. 满 1 出土 鐵鎌



37. ピット出土 土器



38. 湿地堆積層出土 土器

報告書抄録

ふりがな	ごばんちょういせき・ほっくつちょうさはうこくしょ・だいじゅうにじょうさ							
書名	五番町遺跡／発掘調査報告書－第12次調査－							
編著者名	石島 二和							
編集機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号							
発行年月日	2008年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
五番町遺跡	兵庫県神戸市 長田区北町 1丁目	市町村	遺跡番号	34度 44分 00秒	135度 09分 10秒	20070205 20070328	430m ²	共同住宅建設
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
五番町遺跡	集落遺跡	平安時代		住居跡		土師器・須恵器		

五番町遺跡 発掘調査報告書
—第12次調査—

発行 神戸市教育委員会 文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-6480

発行日 2008年3月31日

印 刷 デジタルグラフィック株式会社
神戸市中央区弁天町1丁目1番
TEL 078-371-7000

